

# 村上春樹・『回転木馬のデッド・ヒート』(2)

酒 井 英 行

## 5 『嘔吐1979』——関係性の飢餓に瀕した男

『嘔吐1979』の「彼」は、『プールサイド』の「彼」に近似した人物と言えよう。性格、生き方、価値観、言わば、生の形において、彼らは双生児と言うべきである。

①彼は長い期間にわたって一日も欠かすことなく日記をつけることができるという稀有な能力を身につけた数少ない人間の一人だったので、……

②僕と同じように彼は古いレコードのコレクターで、③それから友だちの恋人や奥さんと寝るのが好きだった。

『嘔吐1979』の「彼」の存在形態の本質を過不足なく端的にデッサンしているであろう。①②③の番号は、無論、私が便宜的に挿入したものである。「彼」の①②③の在り方は密接に関連しており、それらの根っこはひとつであるはずだ。

題名になっている（嘔吐）という事象を直接的にもたらしているのは③の性向であるので、それについては後に詳しく検討するとして、先ず、①と②について考えてみたい。「稀有な能力」だと「僕」に評される①の性向。日々の出来事、人間関係から派生してくる心情を心に蓄積させないための日記記述。自分の中から感情を追放するための文字化。出来事、人間関係の外郭だけを記録することによって、その自身を自己から放逐しているのだ。生々しく不定形な現実、それを確実な記号に置き換えることで、人生の現場から逃避しているのである。人生を咀嚼する手間暇を端折って、その形だけを記号として記録しているのだ、と言い換えてもよい。

「長い期間にわたって一日も欠かすことなく」日記記述を継続できる「彼」が、自己管理能力に優れた自律心の持ち主であることは間違いない。「稀有な能力」の持ち主と言う他ないのだが、裏返せば、不定形な人生の現場を引き受けられない機械的人間、言わば、ロボットであることを意味しているのだ。「どうです日記をつけておくとなかなか便利なものでしょう？」と「彼」自身が言っているところに垣間見えているように、「彼」の信条は便宜性、功利性の優先的な追求であろう。現実の人生を記号で記録して残すことは、記号の（ヘコレクター）と言えないであろうか。生々しく、掴み所のない現実を記号化（モノ化）したため込む（ヘコレクター）。その意味で、日記記述の心性は、②の性癖に通底してであろう。「古いレコードのコレクター」である「彼」、**「彼」**はモノをため込む性癖の持ち主なのである。モノをため込む（ヘコレクター）である「彼」と（嘔吐）する（食べ物を吐き出す）「彼」とのアンビバレントに見える関連、そして③の性向との関連はどのようなものであろうか。

二十七歳の「彼」、妻もいないし、「決まった恋人」もない。「自前のやつ」を持たないのだ。モノの（ヘコレクター）でありながら、愛情関係に組み込まれた妻、恋人という女性の（ヘコレクター）ではないのである。いや、「でありながら」と言うより、「であるから」と言うべきかも知れない。モノの（ヘコレクター）であることと、愛情関係に組み込むべき女性の

へコレクターでないこととは同じことなのだ。生々しく不定形な現実を記号に置き換えてしまう性向と、妻や「決まった恋人」を持たない性向とは地続きなのである。「彼」は愛情関係という、生々しく不定形な、生きた人間関係を回避しているのだから。「自前のやつ」をため込まないことで、生きた人間関係が必然的に抱え持つはずの日常性、祝祭的でない時間、心理的負担、責任、言わば、篩にかけない、総体としての関係性から自由であろうとしているのだ。

「友だちの恋人や奥さんと寝るのが好き」な「彼」、「友だちのつれあい専門に寝」る「彼」。人生の現実を仮想現実化(記号化)する、あの日記記述における心理的メカニズムで異性に関わっているだけであろうか。「彼」の意識ではそうであろう。しかし、不特定多数の、見知らぬ行きずりの女性とセックスしているのではないことに眼を向けるならば、「彼」の別の面持ちが見えてくるのではなからうか。

彼はとにかく友だちの恋人や奥さんと寝るといふ行為そのものが好きなのだ。

「べつに寝取る、とかそういう屈折した思いは僕にはないんです。彼女たちと寝ると、僕はすごく親しい気分になれるんです。要するに家庭的な気分ですね。だってそれはただのセックスですものね。ばれなければ誰を傷つけるというものでもないし」

「……つまりこれは単なる親しみをこめたゲームのようなものであって、深入りするつもりもないし、誰かを傷つけるつもりもないってことですね。……」

『プールサイド』の「彼」に近似しているであろう。『プールサイド』の「彼」には、『嘔吐1979』の「彼」とは違って、妻がいたわけであるが、妻と生きた夫婦関係を取り結んでいたわけではなく、「恋人」を作り、しかし、「一カ月に一度か二度」セックスをするという以上に「深入りするつもり」はなく、「恋人」とのその関係は妻に露見することはなかつ

たのである。関係性に「深入り」することなく、「ばれなければ誰を傷つけるといふものでもない」と考える精神構造。彼らは濃密な関係性の底に降り立つことのできない、自分自身の心の中に意識的には罪意識を形成できない人間なのだ。

「寝るといふ行為そのものが好き」、「それはただのセックスです」、「単なる親しみをこめたゲームのようなもの」と畳み掛ける「彼」。その前提に形成されているべき、そしてそれ伴うべき親密な愛情関係という生きた関係性を切り捨てたセックス。不定形な重みのある人生を記号に置き換えようとする「彼」においては、その延長線上にある自然な行為、欲望表現ではあろう。関係性の表層だけを掬い取り、関係性の生々しいリアティを消し去ろうとする「彼」。

しかし、「ただのセックス」、不特定の見知らぬ女性との間のセックスにおいても、「彼」の欲望は充たされるのではあるまいか。「彼」が求めているものは、むしろ、不特定の見知らぬ行きずりの女性との関係によってこそ完璧に得られるのではあるまいか。何故、そうしないのか。「彼」はとにかく、「友だちの恋人や奥さんと寝る」、「友だちのつれあい専門」にセックスすることに終始するのである。何故であろう。もう一度引用してみよう。

彼女たち（「友だちの恋人や奥さん」と寝ると、僕はすごく親しい気分になれるんです。要するに家庭的な気分です。

「ただのセックス」によって、「彼」は、実は、「親しい気分」、「家庭的な気分」を味わおうとしているのだ。自家撞着に陥っているのであろうか。「ただのセックス」、「ゲームのようなもの」と言わせているのは、「彼」の意識であり、「彼」の無意識は、そこから「親しい気分」、「家庭的な気分」を得ようとしているのだ、と見るべきなのである。意識と無意識との食い違いであって、「彼」自身としては自家撞着に陥っているとは感じていないであろう。人生の現実的な営みを記号化し、モノをため込もうとするのと同じ意識構造で、「自前のやつ」を持つことなく、「ただのセックス」によって欲求を充たしているのである。「自前のやつ」との生きた人間関係が不在の空虚さ、「ゲームのようなもの」でしかない「ただ

のセックス」がもたらす空虚さ、その空虚さを癒そうとして、「彼」は、「友だちの恋人や奥さん」専門にセックスしているのだと考えられる。

人生の現実を記号化、モノ化しようとする「彼」の意識は、恋人や妻との関係というステディな関係性、つまり、責任、日常性を必然的に背負い込む奥行きのある関係性を排除しようとしているのだ。「彼」の意識によって削り取られた奥行き、「彼」の心の深部はそれを取り戻そうと藻掻いているのである。「彼」は〈愛情〉に飢えているのだ。関係性の濃密さに対する堪え難い飢え。その飢えを充たそうとする心の欲求が、「友だちの恋人や奥さん」をセックスの対象として選ばせていることは言うまでもない。見知らぬ行きずりの女性との「ただのセックス」では得られない「親しい気分」、「家庭的な気分」。まるでヤドカリが貝殻を借りるように、「友だち」の役割、立場を借りるのである。「友だちの恋人や奥さんと寝る」ことよって、そのときだけ、「友だち」が受け持つ役割に成り代わるのである。自分の「恋人」や「奥さん」とセックスしている身振り。ステディな関係性に自分がある擬態。「恋人」や「奥さん」との本来の不定形な関係性、背負うべき責任を回避しながら、彼女たちの「つれあい」の貝殻だけを借りることで、「親しい気分」、「家庭的な気分」を味わっているのである。恋人関係、夫婦関係の上澄みだけを掬い取ろうとしているのだ。仮想現実を生身の体で生きていると言う他ない。

そういう「彼」に、〈嘔吐〉が訪れ、〈電話〉が鳴り続けるのである。新しい、未経験な事態が生じているわけではなからう。〈嘔吐〉と〈電話〉は、今まで述べてきた「彼」の生の形を視覚化、具象化したものに過ぎないのである。「彼」の生き方の歪みを拡大して見せる拡大鏡だと言い換えてもよい。

〈嘔吐〉とは、食べ物や胃で十分に咀嚼することのないままに、体の外に吐き出している状態である。人生の現実、人間関係の奥底を咀嚼しない生き方に重なるであろう。関係性の奥行きを咀嚼しないで、その外形だけを丸飲みする「彼」

が「嘔吐」するのは当然なのだ。食べ物を咀嚼しないままに体の外に吐き出す「嘔吐」が、「彼」に生の危機をもたらしていることは確実である。「彼」は「栄養」を摂取できないのだから。モノの「コレクター」ではあり得ても、「栄養」(愛情)の「コレクター」ではあり得ないのである。「栄養」が生きていく身体に不可欠なように、「愛情」は生きていく精神(人間同士の生きた関係性)に不可欠なのである。「彼」は心身の危機に瀕しているわけであるが、「彼」(の意識)は、精神的な危機をまだ明確には察知できていないのだ。察知できていないからこそ、「嘔吐」による空腹を充たすべく、咀嚼・吸収することのできない食べ物を食べ続けながら、相変わらず、「親友の恋人」との仮想現実的なセックスを楽しみ続けるのである(「親友の恋人」とセックスしておきながら、「親友」と言うところが、いかにも「彼」らしい)。「嘔吐1979」において、食べることにセックスすることがアナロジカルに描かれていることは間違いない。

嘔吐したあとでバスルームで歯をみがいでいると電話のベルが鳴り、彼が出ると男の声が彼の名前を告げて、そして電話はぶつんと切れた。たったそれだけだった。

「たったそれだけ」の「電話」ではあるが、「嘔吐」に並行して執拗に鳴り続ける「電話」。「嘔吐」がそうであるように、「電話」も、「きまって」、「彼」が「一人きり」のときにかかってくるのである。「彼の名前」だけしか言わない、「絶対に」、「それまで耳にしたことのない男の声」、それは、「電話」機を通過した(「電話」機によって変声された)「彼」自身の声だったに違いない。「まるで電話がドアをあけて道を拓きそこから嘔吐が入ってきたような具合」と言っているように、「電話」とは、「彼」に「嘔吐」を催させるもの(「彼」に「栄養」イコール「愛情」を摂取できなくさせるもの)、つまり、「彼」自身(の生き方)に他ならない。男の声が、「彼の名前」を言うだけなのは当然なのである。人間関係を咀嚼しない生き方が「嘔吐」に表象されているのに対して、「一人ぼっち」の「彼」自身(の生き方)を浮き彫りにする機能を付与されているのが「電話」であると言えよう。

「……。じつさいの話、平均してみると僕は一日24時間のうち23時間ちよつとまで一人でいるんですね。一人ぐらしだし、仕事のつきあいはほとんどないし、仕事の話は大抵電話で済ませちゃうし、恋人は他人の恋人だし、飯は九割がた外食だし、スポーツをやるつたつて一人でエンエンと泳ぐだけだし、趣味というところとおり一人で骨董品みたいなレコードを聴くくらいだし、仕事だつて一人ぼっちで集中しなきゃできない種類のものだし、友だちはいるけどみんなこの歳になれば忙しくてそんなにしよつちゅう会えるわけじゃなし……そういう生活つてわかるでしょう？」

このように、人生のほとんどの時間を一人きりで生活する「彼」自身の象徴が〈電話〉であると考えられるが、しかし、現実的な関係性として「一人ぼっち」であることと、心的現実として「一人ぼっち」であることが同じではないことを忘れてはなるまい。「友だち」と何回会うか、何時間共にいるかは、実はそれほど本質的な心的現実の問題ではないのだ。「親友の恋人」とセックスしていながら、平気で、「親友」と言う精神構造のほうが問題なのである。「友だち」、「親友」の名に相応しい関係性を取り結んでいないのだ。したがって、日常生活の中の「一人ぼっち」それ自体は本質的な孤独とは言えないのである。しかし、実際的な「一人ぼっち」を招来しているものは、〈嘔吐〉を引き起こさせる「彼」の生き方であることは間違いない。実際の一人きりであることと、精神的に一人きりであることは、「彼」の場合は結局のところ同じことなのだ。「彼」の生き方、精神構造という一枚の絵が、ルビンの盃のように反転して、〈嘔吐〉に見えたり、〈電話〉に見えたりしているだけである。

〈嘔吐〉と〈電話〉として表象されている「彼」の歪んだ生き方、「彼」自身、それに心の奥底では（無意識裡には）気づきかけているのだ。〈嘔吐〉と〈電話〉とが、「全面的にか部分的にかはわからないが、とにかくつながっているらしいこと」、そして、それらが、「気楽なものではないらしいこと」に気づきかけているのだ。「要するに自分一人の力でなんとか片づける以外に方法はない」「彼」自身の問題であることにも。心身の危機に陥っている「彼」、その「彼」の無意識が

意識に呼び掛けていたのである。

「でもね、まともな人間は友だちのつれあい専門に寝たりはしないもんだぜ」

「とすると」と彼は言った。「村上さんはそれが僕の中のある種の罪悪感が——自分でも気づかない罪悪感が——嘔吐とか幻聴とかいう形をとって結像したものじゃないかって言うわけですね」

「僕は言っていない。君が言っているんだ」と僕は訂正した。

「僕」に誘導された形であつたにしろ、「罪悪感」を口にしたのは「彼」自身であることは確実である。「いろんなことをわりに真剣に考えるよう」になつていた「彼」、「ちゃんと腰を据えて考えてみ」るようになった「彼」、へ嘔吐とへ電話を契機にして、地殻変動が「彼」の深部で起こっているのだ。「ただのセックスですものね。ばれなければ誰を傷つけないというものでもないし」と考えていた「彼」は、関係性の規範、倫理を自己の内部に樹立することの出来ない人間であつたわけだが、「友だちのつれあい専門に寝」ることの「罪悪感」に、意識と無意識の狭間で気づいているのだ。「自分でも気づかない罪悪感」を言語化するというアンビバレントな発見。意識と無意識の狭間に地殻変動が起こっている「彼」が「混乱」に見舞われていることは確実である。

しかし、「彼」は多分、「回転木馬」から降りることはできないのだ。「僕はそういうタイプの人間じゃないんです」、「彼」は「彼」の自意識から離れられないのである。「我々は我々自身をはめこむことのできる我々の人生という運行システムを所有しているが、そのシステムは同時にまた我々をも規定している。それはメリー・ゴラウンドによく似ている」(『はじめに・回転木馬のデッド・ヒート』)。「彼」は、「降りることも乗りがえることもできない」「回転木馬」の上で、「彼」自身、「彼」の自意識という他ない「仮想の敵」に向けて、「熾烈なデッド・ヒートをくりひろげ」るしかないのである。

しかし、この生の形は、「彼」だけのものであるはずはない。「あるいは、それは今度はぜんぜん別の人の身に起こるか

もされせんよ。たとえば村上さんとかね。村上さんだつてまるっきりの潔白つてわけじゃないでしょう?、「そう、「僕」(村上さん)の問題でもあり、我々の問題でもあるのだ。

## 6 『雨やどり』——性生活の経済的側面／経済生活の性的側面

「僕」が入った「新しいレストラン・バーのような店」。「表参道を渋谷寄りに入つたところ」にある、「デザイナーとかイラストレーターといった種類の人間が集まつて感覚革命の話をしているようなタイプの店」。最先端の都市感覚を取り入れたおしゃれな店であろうが、「僕」はその店について、「こういう店はどんな時代にだつて必ずある。百年前からあつたし、百年後にもあるだろう。」と思うのである。時代の標語と言うべきモダニズム、新感覚の風俗に距離をおいた、醒めた感想をもちますのである。「僕」がこの店に入つたのは、〈雨やどり〉をするため、「ただ単にその近くを歩いていたら突然雨が降り出したから」に過ぎない。最新流行の都市感覚を気取つた店に対する皮肉、からかい、時代の流行に対して斜に構えるシニシズムであろうか。『雨やどり』の「僕」には、特に冷笑的と言わねばならぬ態度が見られるわけではない。同化しないこと、距離をおくこと、これが「僕」の処世の態度であるようだ。距離化は当然ユーモアを惹起するから、「僕」の語りから笑いが生じるのである。皮肉っぽいところがないわけではないが、「僕」の心はやわらかく、温かいのである。

メニューが選ばれてきて、ビールの項を見ると、輸入ものだけで二十種類ものブランド名が並んでいた。僕は適当なビールを選び、つまみにはちよつと迷つてからピスタチオの皿をとつた。

「輸入ものだけで二十種類もの」ビールを揃えるのは、店にある種の雰囲気をもし出すため、つまり、店の方針を打ち出すためであつて、客のニーズに实际的に應える必要性からではなからう。さつさと、「適当なビール」を選ぶことで、

「僕」は、店の方針を無効化してしまうのである。絶対的な価値観として、最新の都市感覚を追い求める風潮から身をかわそうとしているのであろう。ひとつの価値観に共時的に染まる、精神的硬直から自由であらうとしているのだ。固定観念に囚われないこと、物事を総体的に見ること、そういう心の動きが「僕」の精神の核にあるようだ。

『雨やどり』の物語内容、「彼女」の話を要約すれば、次のようになるであらう。

その時一緒に飲んでいた女の子は、何年か前にお金をもらって複数の知らない男と寝たことがあると言った。

「彼女」は、自ら明確には分析することのできない、「彼女」の心理を分析してみせた作品ではあるまい。物語内容の主人公は確かに「彼女」ではあるが、『雨やどり』の主人公は「僕」であり、「彼女」の物語を読者が解釈するための光源となる「僕」の人生観、人間観に主題が置かれているのである。

最近ある小説を読んで、金を払って女と性交しないというのはまっとうな男の条件のひとつであるという文章にであった。こういうのを読むと、なるほどな、と思う。

僕はごく単純にセックスというものは無料だと考えていた。ある種の好意と好意（もつと違った呼び方もあるのだろうが）が出会えば、そこにごく自然に、自然発火のごとくにセックスが生じるものだという考え方である。若いうちはたしかにそれでうまくいったし、だいたい払おうにも金そのものがなかった。こちらにもないし、向うにもない。引用の前者と後者の考え方は、「無料」のセックスという点では同じではあるが、男性のポリシーとしてのそれか、心身の自然としてのそれかという点では異なるであらう。後者は、「昔、ずっと若い頃」の、言わば、「僕」の過去形の考え方であって、今現在の「僕」の考え方であるわけではない。しかし、作品の結末は、「そして僕はその昔、セックスが山火事

みたいに無料だったころのことを思い出した。本当にそれは、山火事みたいに無料だったのだ。」というように、「昔、ずつと若い頃」の「僕」の考え方で締め括られているのである。今現在の「僕」は、「ごく単純に」そう考えているわけではないが、やはり、「セックスというものは無料だ」という考え方であることには変わりはないのだ。いや、「ごく自然に、自然発火のごとくに」生じるセックスへの郷愁のようなものがあるのだ、と言うべきかも知れない。だから、前者の考え方は大きく異なると言わねばなるまい。

「だいたい払おうにも金そのものがなかった。こちらにもないし、向うにもない。」「僕」の「無料」のセックスへの郷愁の根底には、女性の身体(性)のみが商品となり、換金価値を持つことへの違和感があるのだ。「金を払って女と性交しないというのはまっとうな男の条件のひとつである」という考え方の根底には、女性の身体(性)のみが商品としての換金価値を持つという固定観念が横たわっているであろう。男性の性幻想の対象として商品化された女性身体。女性を男性の性幻想にさらされた性的身体に抑圧してしまう性差別。「ある小説」の中の性についての考え方は、このような固定観念、性差別に居座ったままの「まっとうな男」のきざなポリシーに過ぎない。欲望の対象としてモノ化された女性の性的身体(性)がある、という観念に囚われていることに変わりないのである。最新の都市感覚を追い求める風潮への疑問のないままに、それを店の看板として掲げた先程の「レストラン・バーのような店」と似ているであろう。「僕」には女性の身体(性)のみが商品として換金価値が付与されることへの違和感(批判、と言えば強すぎるであろう)があるのだが、しかし、「年を取り、それなりに成熟」した「僕」は、その違和感を声高には語らないのである。『雨やどり』の中で唯一ゴシック体で書かれている、「我々は多かれ少なかれみんな金を払って女を買っているのだ」という箇所には込められている苦い思い、現状の男女間の性愛関係に横たわる本質的な部分を認識してしまった(らしい)苦い思いで、性愛関係に幻滅しているからである。しかし、『雨やどり』の村上春樹は、「多かれ少なかれみんな金を払って女を買っている」という、男女の

その根本的な位相を具体的に暴露するわけではないのである。

個人的な話をする、僕も金を払っては女と性交しない。したこともないし、この先とくにしようとも思わない。しかしこれは信念の問題ではなく、いわば趣味の問題である。だから金を払って女と寝る人間をまつとうじやないとは僕には断言できないような気がする。たまたま、そういう巡りあわせになっているというだけのことなのである。

女性の身体(性)のみが商品化されることへの違和感から、「自然発火」のごとき「無料」のセックスへの郷愁を持ちながらも、ひとつの思想・主義に囚われまいとする「僕」の立つ位置はここしかないであろう。「信念の問題」ではない、「くよな気がする」、「たまたま、くよだけのことである」、「僕」は徹底的に、ひとつの思想・主義から逃走し、精神の自由を保とうとしているのである。しかし、「趣味の問題」に過ぎぬ、と言ったのでは、他者(読者)に向けて言語化したことにならない。男女間の性愛関係の機微、「年を取り、それなりに成熟」した「僕」の複眼的な見方が捉えた人間観を、思想・主義にならざるにぎりぎりの手前で言語化するとすれば、次のようにしかならないであろう。

つまり我々の存在あるいは実在は様々な種類の側面をかきあつめて成立しているのではなく、あくまでも分離可能な総体なのだ、という見方である。(中略)結局は同じひとつのものが違った名称で呼ばれているにすぎないということなのである。だから性生活の経済的側面が経済生活の性的側面であったり、というのも十分にあり得るのだ。

ひとつの見方ではあるが、凝り固まった信念・主義の表明ではない。男女間の性愛の関係性の多面性、複合性を指摘しているのだ。「年を取り、それなりに成熟」した現在の「僕」が辿り着つた男女間の性愛関係についての見方。「あくまで分離不可能な総体」である「我々の存在あるいは実在」が、ルビンの盃のように、「性生活の経済的側面」／「経済生活の性的側面」というふうな反転して見えるに過ぎないという考え方。

『雨やどり』に登場する「彼女」、「彼女」の心の動き、行動は、現在の「僕」が辿り着つた男女間の性愛関係につ

いての見方を具体化したものに過ぎないのである。「僕」の見方が妥当であることを証明するために作り出された人物、言わば、「僕」の操り人形なのだ。「雨やどり」という作品の中だけで見る（作中人物の「僕」に即して見る）ならば、「彼女」の話の聞くことで、「僕」がそのような見方をするようになったのだと言うべきであろうが。

その時の、二十八歳の「彼女」は、言わば、人生行路のなかで〈雨やどり〉をしていたのだ。「大手の出版社」の「女性向け月刊誌の編集者」であった「彼女」。「同じ雑誌の編集者同士」であった、十歳年上の妻子ある男性と恋愛関係にあった「彼女」。六年間続けた編集者としての仕事、三年間続いた恋愛、「彼女」はほとんど同時にその両方を捨てたのである。仕事（「経済生活」）と恋愛（「性生活」）の両面において〈雨やどり〉中であつたのだ。（我々の存在あるいは実在）は「あくまで分離不可能な総体」であるのだから、「経済生活」、「性生活」という区分は意味をなさないのではあるが）「経済生活」のほうは、「PR誌かタウン誌かファッション・メーカーのパンフレットとかいった小さな仕事」ではあつたが、新しい仕事先が決まり、「それで一ヵ月間、仕事につくのはのばしてもらつて、そのあいだ何もせず、本を読んだり、映画を観たり、小旅行をしたりして過ごすことに決めた」のである。

煩雑で神経のすりへる仕事から解放されて思う存分好きなことができるというのは実に素晴らしいことだつた。気が向くと料理を作り、日が暮れると一人でビールを飲んだりワインを飲んだりした。

しかしその休暇が十日めを過ぎたころから、彼女の中で何かが變つてきた。もう観に行きたいと思う映画は一本もなくなり、音楽はうるさいだけでLP一枚をとおして聴くことができなくなり、本を読むと頭が痛んだ。作る料理はどれも気が抜けた味がした。（中略）變に神経がたかぶつて夜中に目がさめ、暗闇でずっと誰かに見つめられているような気がした。彼女はそういう時、空が白んでくるまで布団をかぶつてずつと震えていた。食欲が落ち、一日気持がイライラした。もう何をする気もおきなかつた。

人生の（雨やどり）を存分に享受することができなかった「彼女」は、仕事と恋愛を離れた自我が無かったのだと言わない。主体的な自我を持たなかったのだ。主体的な自我を形成する心の余裕、人生のなかで立ち止まる時間がなかったのである。おのれの知的労働者としての自我と性的身体との間に折り合いをつけられなかったのかも知れない。「煩雜で神經のすりへる仕事」を走り続け、そのストレスの解消法であるかのような、週に一度の恋人との逢瀬……。「男の方には妻と離婚して彼女と一緒にいるつもりははじめからなく、彼女に対してもそのことははっきりと説明していた。彼女もそれはそれでいいと思った。」、大人の恋と言えはそれまでであるが、人間性の奥深くで関わる行為としての恋愛関係であったわけではあるまい。仕事（「経済生活」）の惰性のような習慣化した肉体関係（「性生活」）に過ぎなかったのである。人生のなかで立ち止まる時間、その時間を自分自身で主体的に生きることを知らなかったのだと言えよう。仕事と情性的な肉体関係を失った（雨やどり）、「彼女」のその空洞が「彼女」を苦しめているのである。分裂症的な状態に陥っているのだ。心身の空白が奥底から「彼女」を責めているのである。

街に出て深まる「孤独」。「一千万の人間のひしめきあう都会の中で、彼女は自分がたまたま孤独であるように感じた。」、一人で立ち止まることのなかった「彼女」が、群衆のなかで「孤独」を深めるのは当然であろう。

私は高いのよ、と彼女は言った。どうしてそんなことを言ってしまったのか、自分でも理解できなかった。でもそのことばがごく自然に口をついて出てしまったのだ。

「経済生活」と「性生活」との両面での（雨やどり）中に訪れた局面である。心身の空虚さが無意識的に引き起こした局面と言うべきかも知れない。言語化できない衝動と言う他ない、五十一歳の獣医との「無料」ではないセックス。「ある種の好意と好意」が出会って、「自然発火」のごとくに生じたセックスであるはずはない。意識的な性欲の発動、「性生活」の満足を得ようとする意識的な心の動きであるはずはない。さりとて、仕事を辞めた「彼女」の意識的な「経済生活」で

あつたわけでもない。意識的に金銭を得ようとしたのではない。意識的な心の動きとしては、どちらでもなかつたのだ。しかし、心身の奥底の促し、無意識的な衝動としては、どちらをも兼ねた行動であつたはずだ。

「お金をもらつて」と、「知らない男と寝た」とは、「彼女」の意識の奥底では渾然一体となつてゐるのである。金銭を支払われなかつたならば、おのれの身体が商品化されなかつたならば、「彼女」は見知らぬ男とセックスすることはなかつたはずである。無論、「経済生活」だけであつたわけではない。

はじめのうち、彼女はこんな状況におちいつてしまつたことにたいしてひどく慌てていたが、彼にじっくりと愛撫されてゐるうちに、余計な思いも少しづつ消え失せ、セックスにだんだんのめりこんでいった。(中略)そしてこの何日かずつと彼女の中でわだかまつていた名状しがたい苛立ちがすっかり消え失せてゐることに気づいた。

恋人と別れた「性生活」の空虚さを埋めるための無意識的な行為であつたわけである。恋人と別れた、その心身の空洞が、見知らぬ男の愛撫によつて充たされてゐることを発見したのだ。「名状しがたい苛立ち」の完全な消滅ということは、「彼女」における、身体的な欲動の占める位置をよく示してゐるわけであるが、「無料」ではなかつたセックスが「彼女」を導いた地平の不思議に注目すべきであろう。「セックスにだんだんのめりこんでいった」のである。

「彼女」が陥つた(明確に意識化されない心身の促しが引き起こした)事態は、「昔、ずっと若い頃」の「僕」の考え方も、そして、「金を払つて女と性交しない」というのはまがつつと男の条件のひとつである」という、男の独善的な考え方も無効にしているであろう。「ごく単純にセックスというものは無料だ」、「ある種の好意と好意(もつと違つた呼び方もあるだろう)が出会えば、そこにごく自然に、自然発火のごとくにセックスが生じるものだ」という「僕」の考え方の純さ、単眼性を「彼女」のセックスは暴露してゐるのである。「お金を払つて」を逆にして、「お金を貰つて男と性交しない」というのはまがつつと女の方の条件のひとつである」にして見れば、「彼女」の人格と行動がその男の独善性を浮き彫りに

するのだが、そのような手続きは不要であろう。「無料」ではない、金銭が支払われたセックスにおいても、「じつくりと愛撫され」ることで、「だんだんのめりこんで」いくことはあるのだ。

「お金をもらって複数の知らない男と寝た」という「彼女」の行為は、性生活の経済的側面／経済生活の性的側面ということ、つまり、「我々の存在あるいは実在」は「あくまで分離不可能な総体」であることを如実に表しているのである。このことを村上春樹は、「彼女」の「いろんな男の人と寝てもらったお金」の処理方法によって、駄目押的に表しているのだ。「全部そっくり三年定期にしちゃったの」、「その頃はもう結婚や何やかやで、いくらお金があっても足りないってことになってるかもね。そう思いませんか？」。まさに、「性生活の経済的側面が経済生活の性的側面であつたり」と言う他あるまい。

## 7 『野球場』——〈嫌な匂いをする汗〉

「彼」は二十五歳、大学卒の独身の銀行員。「恋人と一緒に休暇をとって」、シンガポール旅行を楽しむことのできる「彼」。外側から見る「彼」の生は安定していて、順調な人生を歩んでいると言えそうである。

彼はとても魅力的な美しい字を書いた。僕が彼と会ってみる気になったのも、もとはといえばそのチャーミングな字がきっかけだった。チャーミングといつても彼の字の美しさは世の中によくあるペン習字的な流麗さとは無縁で、どちらかといえばそれは不恰好で素朴で個性的という種類のものだった。ひとつひとつの字はぐらぐらと左右に振れた金釘流でバランスも悪く、どこかの線が長すぎたりあるいは短かすぎたりしていた。しかしそれにもかかわらず、彼の字には唄でも歌うようなおおらかさがあつた。僕は生まれてこのかたこれほど美しくて趣きのあるペン字を見た

ことは一度としてなかった。

小説家である「僕」にこれほどまでに思わせた「彼」の魅力的な文字。「極端に個人的な考え方をする人間」である「僕」に、「彼」が書いた小説を読む気にさせたのも、「彼」に会ってみる気にさせたのも、ひとえに「彼」の書いた文字であったというのだ。「ペン習字的な流麗さ」が浮上させる美しさ、そのような均整のとれた、過不足のない安定した美しさには、「僕」の心は動かされはしなかったであろう。過剰と欠損がせめぎ合い、不安定に揺れ動き、崩れそうにバランスを失いながらも、危ういところで辛うじてその姿勢を正している、それでいてその姿全体では流動的な美しさを形成している、というのである。アンバランスなバランス、不恰好な乱調の美しさ、とでも言う他ない、アンビバレントな文字である。文字にはその人の性格が現れると言われているが、村上春樹は、「彼」の文字の佇まいに仮託して、「彼」の精神構造、生の有り様を粗描しているわけだろうから、我々は「彼」の生の内部に踏み込まねばならぬであろう。

二十五歳の銀行員である「彼」が、「生まれてはじめて」書いたという、「シンガポールの海岸」を舞台にした小説。「ええ、もちろん本当にあったことです。去年の夏のことです」と彼はいかにも当然という顔で言った。「本当にあったこと以外は僕にはうまく書けないんです。だから本当にあったことしか書かないんです。何から何まで現実に起ったことです。……」

「いかにも当然」という、「彼」にとつては自明の虚構化の意識が皆無の小説観は、「彼」が考えるほどには当然のことではあるまい。現実を組み替え、自分を変装させる、小説とはむしろそうした虚構を意味するのが普通であろう。仮構された現実を仮構された新しい自分が生きる、といった表現意欲とは無縁な表現衝動。銀行員としての生に欠損感があるふうにも見えない「彼」に、強い小説家志望の野心があるとは思えない。現実（の自分）を虚構化する意思もなく、小説家への意思も強くはない表現者。一体何が「彼」に小説を書かせているのであろうか。

「突拍子もない」ことというわけではないが、「しょっちゅう変な体験をする」という「彼」。

「……でも僕にとつては、それは何かしらちよつと奇妙な出来事なんです。現実が少しばかりずれてしまったようなね。つまりシंगाポールの海岸のレストランで蟹を食べて、吐いて、虫が出てきたのに、女の子の方はなんともなくてすやすや寝てるといったような話です。変といえば変だし、変じゃないと言えば変じゃない。そうですね？」

「突拍子もない」ことを体験したというのであるならば、「彼」の心が明らかに病んでいて、その「突拍子もない」ことが、(現実世界に生じた「本当にあつたこと」ではないのに)「彼」の心的現実(病んだ心の中の現実感のある現実)となつてゐるか、あるいは、「彼」の心の外の現実(「突拍子もない」ことが「本当にあつた」か、のどちらかであろう。「彼」が直面しているのはそのような事態ではない。「彼」の精神に明らかでない異常があるわけでも、現実(「突拍子もない」ことが)に明白な異常が起きているわけでもないのだ。顔だけ動物の人間というズレに不意に出会つた時、それが動物のマスクを被つた人間であることが理解出来るまでの時間の中で、我々はそのズレに虚を衝かれ、現実(「突拍子もない」ことが)に異変(「突拍子もない」ことが)が起きたような大きな混乱と恐怖に陥らされるであろう。「彼」が言明している現実のズレはこの種のズレとは無論違ふであろう。しかし、現実の「何かしらちよつと」したズレは、却つて、静かに潜行する継続的な深い混乱に陥れるのではなからうか。「現実が少しばかりずれてしまった」体験は、「彼」の精神の奥底を確実に波立たせているのだ。その現実のズレ(の意味)を凝視することによつて、混乱した心を治癒しようとする希求、「彼」の「本当にあつたこと」しか書かない「自己表現の意図はそこにあつたはずである。自己治癒としての小説」。

しかし、自己治癒であるべきはずの自己表現は、却つて、「彼」をより奥深い混乱に突き落としたのではなからうか。「自分」が書こうとした素材と自分が書いた作品との間には大きなギャップがあつて、それがいつか作家にとつて何を意味するのか自分にはよくわからない」という、新たなより大きいズレの感覚に導かれ、深く混乱してゐるのである。現実から

現実感が剝離したようなズレに見舞われているのであり、「彼」が「僕」に小説の批評を依頼した意図も、このズレの意味を問うことにあつたはずである。

現実のズレ、現実の現実感が剝離した感覚に直面した「彼」の心が混乱していたとしても、「彼」の人格の表皮までもがひび割れ、揺れ動き波立っていたわけではない。銀行員としての任務の遂行、恋人との人間関係の構築に明らかな不適応性を見せていたわけではないのだから。手紙の文章が「非常に礼儀正しく、シンプルで正直」な「彼」、むしろ、適切に社会化された、端正な人格の佇まいを感じさせるのである。

とはいっても肥満しているわけではなく、肉のつき方に余裕があるという程度だ。頬がふっくらとして額が広く、ふわりとした髪をまん中から両側にわけ、線の細い丸形の眼鏡をかけていた。全体的に清潔で育ちが良さそうで、服装の趣味もしっかりとしていた。そのへんは予想どおりだった。

小説家である「僕」の眼に映った「彼」。手紙の文章に表出された「彼」同様、端正、温厚な雰囲気、美的センスのある好青年と言う他ない。小説家である「僕」の観察眼には狂いはないであろうが、作中人物としての限定的視点は免れず、「彼」の人格の表層的スケッチであると言う他ないであろう。

社会に向けた顔（仮面）と真の顔との意図的な使い分けであるはずはない。「彼」はアンビバレントな矛盾存在なのである。現実のズレ、現実の現実感の剝離した感覚に混乱する心を抱えながらも、端正な規律性を保持している「彼」。アンビバレントな矛盾的存在でありながら、ぎりぎりのところで平衡を保っているのだ。乱調の美とでも言う他ない「彼」の文字が表象するところである。初対面の「彼」、小説家である「僕」の洞察力のある観察眼が捉えた端正な「彼」の風貌、しかし、所詮は、外（他者）の眼に映った「彼」の像でしかないのである。作中人物である「僕」の観察眼は、安定した「彼」の面立ちしか捉えないのであるが、語り手としての「僕」の語り（つまり、「野球場」という作品）は、「彼」の不安定な

自我を語り出しているのだ。

「僕は今でも彼女と最後に話をしたときのあの汗のねばねばとした感触と嫌な匂いをはつきりと覚えています。そして僕はああいう汗だけはこの先二度とかきたたくないと思っっているんです。もしそれが可能であるなら、ということですがね」と彼は言った。

「僕」の眼には「全体的に清潔」に見える「彼」の中に隠された、「ねばねばとした感触」のある「嫌な匂い」の汗。五年後の今でも、触觉と嗅覚に生々しく張り付いている「ああいう汗」。「この先二度とかきたたくない」というほどに忌避すべき「ああいう汗」、その不安を声高に語るわけではないが、「彼」は実は、再びその汗をかく不安に心の奥底では怯えているのである。「二度とかきたくない」、「もしそれが可能であるなら」、「彼」は「あの汗」を自己管理する自信がないのである。「あの汗」を自己の内部に閉じ込めておく自信がないのだ。「あの汗」とは何か。

「現実が少しばかりずれてしまったような」「変な体験」、そのひとつとして語りだされた、「五年ばかり前」の「大学の三年生の時」の「彼」の体験。

「……①僕はその頃ある女の子に夢中になっていたんですが、彼女は僕のことなんか気にもとめていないようでした。彼女はかなりの美人で、頭も切れて、どことなく近づきにくい雰囲気がありました。(中略)②彼女の口ぶりからするとどうも決まった恋人がいる風でした。(中略)③それで僕は彼女の生活を徹底的にチェックしてやろうと思ったんです。彼女についてのいろんなことがわかれば、何かしらのとっかかりもつかめるはずだし、もしそれがだめでも少なくとも僕の好奇心は充たされるわけですから」

①②③の番号は、無論、私が挿入したものである。「彼」の①②の心理は、青年の恋愛における入り口の心理的動きとして一般的なものかも知れない。虚像と言う他ない他者像の創出、他者の実像の書き換え、これこそ恋愛心理の波立ちの主

要部に他ならないのであろうが、好きになつた相手にアクセスすることをためらわせてしまうのもこうした心の働きであると言わざるを得ないのである。他者の実像を装飾し、美化してしまふ変形作用によつて、高嶺の花である虚像を造り出し、その自分が創作した他者から自分が拒まれているように感じてしまふのが（片思いの）恋愛心理の初期形態であらう。自分がそれから拒まれてゐることこそが、懂れるべき高嶺の花であることの証しとなるのだから。アクセスする前に既に陥つてしまふ擬似失恋感…。先回りした失恋体験である。①②の心の波立ちを抱える「彼」は、だからこそまさに恋に陥つてゐるわけであるが、③への踏み出しはノーマルな（片思いの）恋愛心理とは言えない。

「何かしらのとつかかりもつかめるはず」、恋愛という人間関係の構築へ一歩踏みだす方途であるかのように見えながらも、「彼」の思考回路は、その実、人間と人間との関係性の規範（倫理）を逸脱することではなかつたのである。「彼」は①②の一般的な恋愛心理である自己納得、自己抑圧によつて、半ば無意識的にはあれ、恋愛関係の構築から先回りして降りてしまつてゐるのだと言わざるを得ない。

相手のことを知りたい、と願ふ心の欲求が、恋愛心理の渦巻きであることは間違ひあるまいが、③の心の波立ちはそれから逸脱してゐるであらう。「彼女の生活を徹底的にチェックしてやろう」、「好奇心」を充たそう、という心の働き（欲求）ほど他者を愛する心から遠いものはあるまい。他者をモノ化し、他者を支配しようとする暴力でしかない。他者のかけがえのない、独立した人格、生命を尊重し、それと生きた真の関係を結びやうとする倫理的行為から脱落してしまつてゐるのであるが、それは①②の擬似失恋感が心に強制した、先取りした恋愛の敗北劇というだけではないであらう。「彼」の肉体的な弱さがなせる業でもある。他者と生きた人間関係を持つ勇氣が欠落してゐる弱さ、その弱い心にこそ芽生える、それと背中合わせの暴力性。他者をモノ化して支配しようとする非人間的行為。

覗き見、窺視……。 「彼女」の部屋の中を「カメラの望遠レンズ」で覗き見る「彼」。

「……それで僕は彼女の生活をたつぷりと眺めることができるようになりました。(中略)それで僕は心ゆくまで彼女の生活ぶりや、それから体なんかを眺めることができました」

「彼女」の眼差しを受けることなく、「彼女」の視線の届かない所から、一方的に覗き見る「彼女」の「生活ぶり」や「体」、それはもはや精神的な営みの抜け落ちた生ける屍とその動きでしかない。人間性と命の輝きを喪失した、言わば、ロボットとその機械的な動き。「たつぷりと」、「心ゆくまで」それを覗き見ることで、「彼女」を「徹底的にチェックしてやろう」という、モノ化して支配しようとする欲求(暴力性)は充たされるかも知れない。他者の眼差しを完全に排除して、一方的に見る行為が、同時におのれをもロボット化、モノ化してしまうことに、このときの「彼」はまだ気づいていない。他人の視線をシャット・アウトして、他人を見たいという欲求は、取りも直さず自己を不可視の存在に変えたいという願望であるが、不可視の存在とは、他者にとつても、見えない(存在しない)存在でしかないのである。清水学が、『思想としての孤独(視線)のパラドクス』(講談社、一九九九年一月)で、「目に見えない透明人間は、むしろ見るための存在である。彼は見られないかわりに見る。というより見られないことを条件に見るのだ。この『見られることなく見る』というのは、ただ彼にのみ与えられた特権である。」、「しかし『見られずに見る』彼が、まわりの事物や他者に対して与えている視線は、そのかぎり『視線』の資格をそなえていない。なぜならそこには、彼の視線を認知する他者の視線が欠如しているからである。」と云うとおりである。「彼女」の死角に入ってしまった、「彼女」に対する「透明人間」に転落しているのである。「彼」の窺視の欲望は、「彼女」との関係性を失った「透明人間」に「彼」を変容させたのである。他者との関係性を失った(人間とはもはや呼べない)得体の知れない生き物に成り下がっているのだ。

「望遠レンズ」で覗き見る「彼女」の生活、「拡大されたフレームの中にとびこんでくる」「彼女」の生活、それは「相当地にグロテスク」なものだったという。精神的な営みを抜き取られたモノとしての「彼女」、それが、「望遠レンズ」の「拡大

大された世界」の中で、「体」と「行為」に分解されたとき、「グロテスク」さの度を強めるのは当然であろう。「体」と「行為」とに切り刻まれた「彼女」、「体」と「行為」の中間項と言うべき精神的な営みを抜き取られた「彼女」は、「決して魅力的なもの」ではなかったのだ。「彼女」を「徹底的にチェックしてやろう」という所有・支配欲求から出発した行為によって、「彼女」への興味を失うというパラドックス。接近しようとする試みが、「彼女」から「彼」を遠ざけたのだ。「望遠レンズ」の中の「彼女」（虚構の「彼女」）を所有することで、現実の「彼女」を失ったと言うべきであろうか。現実の生身の「彼女」との人間関係とは異次元の場所で、「望遠レンズ」の中の「グロテスク」な「彼女」だけが肥大化していったことは確実である。

無論、「彼」はおのれの行為が、「背徳行為」であることに気づかなかつたわけではない。「背徳行為ですよね、明らかに」と言っているように、行為の背徳性を知悉していたのである。「みんなの前で僕の背徳行為が——背徳行為ですよね、明らかに——すっかり暴かれて、みんなに糾弾され蔑まれ、そのまま社会から放逐されてしまうんじゃないかという悪夢から僕は逃れることができませんでした。じつさい何度もそういう夢を見て、汗ぐっしょりになってとび起きました」。しかし、この汗は、後の「彼女」と対面したとき流した汗とは異質なものであろう。悪夢にうなされて流した汗は道德的な汗とも言うべきであろうか。暴かれなければ自己のなかに形成されない意識という点では恥意識に止まっているとも言えるのだが、自ら、「背徳行為」と言うところには、罪意識も発生していると見るべきである。恥意識と罪意識が入り混じった罪悪感に苦しんでいるのである。「みんなの前で、みんなにく、社会からく」と言っているように、「彼」の意識は、あくまでも対人関係、対世間関係に置かれているのであり、だからこそ道德意識と言うのであろうが、社会的存在としての人間、関係性のなかの人間の問題にしかまだ眼が届いていないと言わざるを得ない。関係性の規範（道德意識）のなかで発生する悪、悪夢で、「ぐっしょり」とかいた汗はその象徴である。言わば、道德の此岸で流した汗と言うべきであろう。後

に、「彼女」の前で流す汗のように、「ねばねばとした感触と嫌な匂い」を伴わない汗であった所以であろう。

「……野球場の向うに見えるほんやりとしたアパートの灯を見てみると、僕の体の中にはそれを拡大して切り刻んでしまいたいという欲求がどんどん大きくなっていくのがわかりました。(中略)まるで液体みたいに僕の中に暴力性が毛穴から浸みだしてくるようなそんなかんじです。そういうものを止めることはたぶん誰にもできないんじゃないかと僕は思います。そんな暴力性が僕の体の中にひそんでいたなんてそれまで僕自身にも認識できなかったんです」

「彼女」に対面したときに流した「嫌な匂い」のする汗」は、この「まるで液体みたい」に、「毛穴から浸みだしてくる」暴力性、「僕の体の中にひそんでいた」暴力性の表徴であることは明白であろう。「徹底的にチェックしてやろう」という、他者をモノとして支配しようとする欲求の究極の形が、「拡大して切り刻んでしまいたいという欲求」に他ならない。社会的存在としての人間の問題を超えた、人間存在の本質、言わば、人間存在の裸形（動物性）が露呈しているのである。道徳を無効化してしまう、存在者に本来的に備わっている暴力性（動物性）だからこそ、「彼」も、「そういうものを止めることはたぶん誰にもできないんじゃないか」と言っているのだ。世界に存在する必然性とも言える攻撃性、存在者であること自体が抱え持つ暴力性。「僕は汗ぐっしょりになっていました。しほれば水たまりができるくらい服はぐしょぬれになっていました。とてもねばねばとして、嫌な匂いをする汗でした。」「彼」は「彼女」の前で、言わば、善悪の彼岸の汗を体の外に奔流させているのである。

何故、「彼女」に向き合うといった対人関係の中で、存在することで自ずから抱え持つ暴力性、攻撃性という汗を奔出させたのであろうか。善悪の彼岸の汗を倫理的な場において流したのは何故か。清水学が、『何ものか』になるためには、他者から『見てもらう』ことが欠かせない。」と言っているように、「彼」は「彼女」から眼差されることで、「透明人間」から人間に帰還することができたのだと見るべきであろう。

「……同じ服をずつとどろどろになるまで着ているような具合になっていました。髭なんてロクに剃らないし、床屋にも行きませんでした。おかげで部屋は腐ったドブみたいな匂いがありました。ビールの缶やらインスタント食品の空箱やらあたりかまわずつっこんだ煙草の吸殻やら、そんなものが部屋じゅうにまるで吹きだまりか何かみたいにならばっていて、その中で僕は彼女の姿を追いつづけていました。……」

「小さな灯」に象徴される「人々の日々の営み」（人間性、「やさしい気持」を失っているのである。「腐ったドブみたいな匂い」がする部屋で、「どろどろ」になった服を着ている「彼」、「彼」自身が腐って、「彼」の自我の輪郭が不定形に溶解していつているのである。不定形な得体の知れない存在、言わば、「透明人間」、「見られることなく見る」「透明人間」になっていたので。「彼女」に向き合い、「彼女」という他者から「見てもらう」ことによって人間回復を遂げ、不定形に溶解した自我に輪郭を形成することができたとき、「彼」の中に潜んでいた暴力性、「嫌な匂いのする汗」を体の外に流し出すことが可能になったのだ。「透明人間」であったときに、関係性の規範（道徳）にしか眼が届かなかった「彼」は、人間に立ち帰ることによって、存在者であることの本質に気づいたのだと言えよう。存在することの本来的な悪、人間の本性としての攻撃性、暴力性に眼を向けることから出発するしかないのだから。人間の本性に眼を塞いだまま、善悪（道徳）を云々するところからは、本当のやさしさは生まれてこないのである。

「とてもねばねばとして、嫌な匂いのする汗」という暴力性を体の外に排出したからこそ、社会化された存在としてのその後の人生の歩みが可能だったことは確かではあろう。しかし、「彼」のアンビバレントな文字に表徴されているように、また、「彼」自身、「あの汗」を自己管理、自己コントロールする自信がないと言っているように、他者をモノ化して支配したい欲求、暴力性から免れることは容易ではないのだ。存在の奥底で渦巻く暴力性を、社会的な生の表に波立たせないように辛うじて抑圧しながら、その奔流に怯えているのである。

語り手である「僕」はどうか。「ペン習字的な流麗さとは無縁」なバランスの悪い「彼」の文字に惹かれたことが、『野球場』のストーリーを回転させていくという仕掛けに暗示されているように、「彼」は「僕」の鏡像に過ぎないのだ。「小さな座敷に向いあつて座」つて「彼」の話を聞くという設定は、「僕」の鏡像との出会い、隠されていた「僕」の裸形の発見のための設定である。「僕」もまた、自我の奥底に潜む暴力性の流露に怯え、自己管理する自信が持てない不安に駆られているに違いない。無論、「僕」の姿はわれわれの鏡像でもあるのだろう。

## 8 『ハンティング・ナイフ』——自分のナイフへ

「沖あいには、平らな浮き島のように大きなブイがふたつ、横に並んで浮かんでいた」——『ハンティング・ナイフ』の「僕」の語りは、「僕」が到達すべきものとしてのブイを、読者の視界に現前させるように語りだすことから始められている。

海岸とブイの間を泳いで行き来する「僕」は、海岸とこの一对のブイをそれぞれの場所から相対化して眺めることが可能なのである。海岸からの視界におさまるブイは、「双子の氷山みたいにぼっかりと海の上に浮かんでいる」のだし、ブイからの視界におさまる海岸は、「どことなく絵葉書みたい」に感じられるのである。

海岸とブイとを行き来する「僕」の設定は、無論、「動かない脚」のためにブイへ到達することが不可能な「彼」との非対称の設定である。「彼」の欠損を補填する存在として設定されているかのような「僕」。「欠落」と「過剰」という非対称性。「昔から心臓がとびきり丈夫で、脈拍数も人よりずっと少ない。スポーツは好きな方だし、病気ひとつしたことがない」というほどに頑健な身体を持ち主である「僕」は、作品の題名に即して言えば、まさに、海（面）を切り裂くへハンティ

ング・ナイフ」と言う他ない。海がこの作品で表象するものは、作品の結末の月光の下で、「僕」がイメージし、「彼」が言語化する「やわらかな肉」であろうから、「僕」は「やわらかな肉」を切り裂くへハンティング・ナイフ」として設定されているのである。しかし、ブイの上から眺める海岸風景が、「どこことなく絵葉書みたい」に見えていることに暗示されているように、「僕」は現実から感じ取られるべき現実感を失いかけていたのであり、現実が作り物めいて見え、嘘っぽく感じられているのである。海（「やわらかな肉」）を切り裂くへハンティング・ナイフであるかのような「僕」は、見掛けほどには、「彼」と非対称の存在ではない。「僕」の頑健な肉体の奥深くでなにかが蠢いているに違いない。

ブイの上空は米軍基地にむかう軍用ヘリコプターの通りみちになっていた。彼らは沖あいからまっすぐにやってきて、ふたつのブイのちょうどまん中あたりを通り、やしの木の列を越えて内陸の方へ飛び去っていった。

対象を攻撃し、銃弾で対象を切り刻み、薙ぎ倒す凶器である軍用ヘリコプター……。米軍の軍用ヘリコプターは、「僕」と上下対称の図形をなす、空（空間）を切り裂くへハンティング・ナイフ」と言う他ない。「目をこらすとパイロットの顔まで見えそうなくらいの低空飛行」で通過していく、暴力的で猛々しいへハンティング・ナイフ。ブイの上空がその通り道になっており、「ふたつのブイのちょうどまん中あたり」の空間を切り裂いて飛び去っていくのである。「双子の氷山みたい」に一对のブイが、へハンティング・ナイフによって切り裂かれるべきものとして設定されていることに留意しておこう。「僕」が海（「やわらかな肉」）を切り裂いて到達する左右対称のブイ、軍用ヘリコプターによって切り裂かれる「双子の氷山みたい」なブイが表象しているものは何であろうか。

「一階に二部屋、二階に二部屋」のコテージ。「僕」と妻が宿泊する一階の隣の部屋に（左右対称の図形をなして）宿泊している母親とその息子（「彼」）。

これほどよく風貌の似た母子というのを、僕はそれまでに見たことがなかった。（中略）二人ともなんだか仕立ての

良いテラード・スーツのような感じだった。

その顔立ちにおいて「双子」であると言う他ない母子。彼らの「双子」性は、顔形の相同性だけに止まるものではない。「驚くほど背が高」い母親と、「母親同様背がかなり高そう」な息子。歴然としている姿形の「対性、相同性」。このように造形、設定された母子が、あのふたつのブイ、「双子の氷山みたい」なブイに重ねられていることは明白であろう。「双子の氷山みたい」なブイは、「僕」の目交から離れないこの「対の母子の表象だったのである。「二人はロビーのふかぶかとしたソファーに向いあつて腰を下ろし」、「いつも母親がうしろに立つて、その車椅子を押していた」、「二人はいつも（二人の部屋の）ソファー・セットに向いあつて座り」、母子の「双子」的な「対性」が強調されているのだ。相同性、「対性」であるがゆえの一体化、実体と影のような不即不離の關係性。彼らの隣の部屋に宿泊し、「ごく自然に彼の姿と彼の母親の姿を一体化して考えるようになっていた」「僕は、このような母子の姿をふたつのブイに重ねて見ていた、あるいは、眼に焼き付いた母子の姿の残像であるかのようにブイを眺めていたのだと言えよう。

離れてしまうことができない、不即不離の一体化した「双子の氷山みたい」な母親と息子の相同性は、しかし、その外見、挙動の「双子」性に止まるものではないのである。「動かない脚」を持つがゆえの、「座ったきり」の「彼」の深い欠損。「動かない脚」、「座ったきり」……。死のアナロジ、死の擬態と言えば恣意的であろうか。ともかく、「彼」が身体的な大きな「欠落」を背負わされていることは確かである。「手足の動きもきびきびとしていた」という、立ち居振る舞いには不自由しないかのように見える母親はどうか。

「母の場合はなんていうか——神経が立つてくると、顔の左半分がだんだんこわばりついてくるんです。冷たくなって——口とか目とかがうまく動かなくなるわけです。奇妙といえば奇妙な症状ですね。……」

硬直する顔面、「うまく動かなくなる」顔面。生きることを停止する顔面。自我そのものと言うべき顔の生の停止、擬似

的な死、死の擬態と言ってよいであろう。しかし、この顔面の生の停止状態は、「彼」が、「でも具合といつても、体の具合が、その、具体的に悪いっていうわけじゃないんです。要するに、精神的なものです。神経的といふのかな、神経が立つんです」と言っているように、身体的な「欠落」と言うよりも、精神的な「欠落」と言うべきであろう。身体的な「欠落」、「動かない脚」を抱え持つ息子と、精神的な「欠落」、「うまく動かなくなる」顔を抱え持つ母親。まさに、「双子の水山みたい」な母子と言う他ない。

この「欠落」の「双子」性は、彼らにいかなる生の形を強いているのであろうか。社会的存在としての生はどのような抑圧されているのであろうか。「ほんのちよつとした要素が欠けただけで、自分が世界の一部から見放されたような気分になつてしまうのだ」、これは、「僕」が自分の外部の「欠落」に関しての自己言及であるが、その「欠落」を自己の内部に抱え持つ彼ら親子の場合の、社会的現実からの「見放されたような気分」の深さは想像に難くないであろう。

「でも引きあげる場所があるというのはいないもんですよ」と言う「彼」は、この社会的現実の中に、自分の居場所、自分が帰属し、依拠するべき位置を持つていないのである。（「引きあげる場所」を持たない「彼」と、「しよつちゅう引きあげどきを見はからつて生活しているような気がする。たぶん性格的なものなだろう」という「僕」との同一性をここでも注目しておこう。）

「さあてね」と彼は言つて、首を軽く左右に振つた。「一カ月になるか二カ月になるか、まあ成りゆき次第つてとこです。ね。僕にはわからない——というのは僕が決めることじゃないからです。……」

「みんなが決めるわけです。あそこに一カ月いろ、ここに二カ月いろつてね。そんなわけで、僕は兩ふりみたいにあつちに行つたりこつちに行つたりしているんです。正確にいうと僕と母ということですがね」

社会的現実の中に、「彼」固有の居場所を与えられず、どこに、何か月居住するかの自己決定権を完全に奪われているのである。「僕が決めることじゃない」、「みんなが決める」、主体性を根こそぎ奪われた受動性の極。「みんな」「彼の父親や「彼の姉の夫など」によって完全に客体化された、「みんな」の操り人形のような生。自動力を持たず、主体的意志を奪われた存在でしかない。完全なる無力な存在。自己決定権、主体性を根こそぎ剝脱されることは、個としての人格を否定されること、いや、存在そのものを無視されることに等しい。深い喪失感、強い無力感に陥らされ、自我の崩壊の危機に瀕していたに違いない。社会的現実という場所のさいはての地に強制収容されていたのだと言っても過言ではない。人間社会の中にありながら、個としての人格を完全に無視、否定されている「彼」の在り方は、社会的に疎外された、「抑圧され等閑視された人間」(清水学・前掲書)としての「透明人間」の在り方だと言えよう。存在しないもののようにしか見られない(扱われない)「透明人間」。

「あの二人はもう引きあげちゃったのかな」と僕は妻にたずねてみた。

「さあどうなのかしら。気がつかなかったわ。もともとがひっそりとした人たちだし、とくに注意もしてなかったから、わかんないわ」と彼女はワンピースをたたんでスーツケースにつめながら、興味なさそうに言った。

「僕」と妻は彼ら親子にとつての世間と言えようが、「僕」が彼らに強い関心を持つその個別的な特殊性は後述するとして、「僕」の妻という世間は、彼らを「透明人間」を見る(見ない)ようにしか見ていないのである。「いわば見ていながら見ていない」(清水学)のである。彼らの「欠落」に視線を浴びせるといふ無意識的な暴力を加えながら(彼らを抑圧しながら)、その存在を見ない(無視する)のである。

「みんな」による疎外・抑圧としての「透明人間」化、非人間化が強力なとき、彼らはその暴力を自我の奥深くに回収し、それを身体化、自己化せざるを得ないのである。自分自身でも「透明人間」になる他ないのだ。

彼らはほんとうに無口だった。彼らの部屋はいつも博物館みたいにしんとしていて、TVの音も聞こえなかった。冷蔵庫のモーター音までが聞こえそうなほどだった。

彼らはだいたいが無口だったし、口を開いてもおそろしく声が小さかったので——まるで読唇術でも使っているみたいだった——僕にはとてもその内容を聞きとることはできなかった。

それから彼らは実に静かに、割れものでも扱うみたいにそつと食事をした。ナイフやフォークやスプーンの音さえも、ほとんど聞こえなかった。ときどき彼らの一切はまぼろしで、うしろのテーブルを振りかえってみると何もかもが消滅しているのではないかという気がするほどだった。

社会的存在としての生から逃れられない限り、「彼」らが採り得る唯一の存在形態は「透明人間」である。自らを「透明人間」化すること。自己の存在を限りなく存在しないものに近づけていくこと、自己の存在をゼロ化し、無機質化すること。生きていないものとして生きること。自己抹殺、自己消滅と言う他ない。「しんと」した「博物館」のような彼らの部屋とは、彼らの自我の表徴に他ならず、彼らは無機質・死の擬態を採って、死者として生きているのだと言えよう。「彼らの一切はまぼろし」であり、「振りかえってみると何もかもが消滅している」かのような存在なのである。「欠落はより高度な欠落に向い」、「僕の仕事はいわばその無を創り出すことにあるんです」、「欠落」の極としての「無」、死。「彼」の「仕事」の「無」の創造とは、無論、「動かない脚」という欠損を抱えるがゆえに、自己拡張の意志を一切放棄し、この世に有を生じさせるエネルギーを一切放出することなく（何をとも生産することなく）、「みんな」が生産する「過剰」をただ消費するだけという負の創造でもあるわけだが。「透明人間」化の極としての自己消滅への欲求、しかし、その反転としての、「彼」の世界への攻撃はないのであろうか。

ところで、「引きあげる場所」が無く、社会的現実の中に居場所を持たず、「あっちに行ったりこっちに行ったりして」、社会的現実を浮遊している「彼」と母親は、その浮遊性においても、また「沖あい」のブイと重ならざるを得ないのだ。「コンクリートのおもり石」に「太い鎖」で繋ぎ止められた「浮き島」であるブイ。社会的現実の中に居場所を持たぬその浮遊性、「彼」の鏡像である「ぼつかりと海の上に浮かんでいる」ブイは、しかし、否定的な自己像でしかないのであるうか。

海岸から離れた「沖あい」に「ぼつかりと」浮かんでいるブイ。孤立性は独立性（単独性）でもある。海岸（社会的現実）に存在する限り、関係性に組み込まれ、単独性は制約を受けることを免れない。主体的な自我は必然的に縮小されるのだ。彼ら母子のように、「欠落」を身にまとう者の場合、海岸（社会的現実）における生が関係性から受ける圧力は大きいのである。「あっちに行ったりこっちに行ったりしている」「雨ふりみたい」に関係性の中で振り回されるだけの「彼」には、関係性の力学は暴力としか感じられないであろう。「要するに我々は——僕の家族のことですが——健康な人間と不健康な人間、効率的な人間と非効率的な人間とはつきりとわかれてはいます。（中略）システムとしては、その機能性じたいとしては、なかなかうまくできてはいるんですね」と「彼」が言う「システム」。「彼」が真に憎むべきもの、抜け出したいものは、この「システム」であろう。この「システム」から抜け出し、超出して、回復したい自我の輪郭、そこそが「沖あい」に浮かぶブイだったはずだ。「彼」が海岸の車椅子に座って毎日見詰め続けていた「ぼつかりと海の上に浮かんでいる」ブイ。海岸から離れて孤立しているがゆえに、単独性を持っているブイ、ある意味では、それは「彼」のそうありたい理想の自我の形であつただろう。「沖あい」のブイは、「彼」が到達したい場所でもあつたのだ。

到達したい理想的な自我に、「動かない脚」ゆえに泳ぎつけない「彼」と、海を切り裂く「ハンティング・ナイフ」のようにブイに一直線に到達する「僕」。

二人は三十分ほどどこかに引きあげてしまうこともあったし、三時間もそこにじっとしていることもあった。泳いでいると、体の上に彼らの視線を感じることもあった。ブイのあたりからやしの木の列までは相当の距離があったから、それは本当は僕の錯覚なのかもしれないが、でもブイに上つてやしの木の葉かげの方に目をやると、彼らはたしかに僕の方を見ているように思えた。ときどき彼らの銀色のポットがきらりと光るのが見えた。ブイの上につぶせに寝転んでぼんやりと彼らの姿を眺めていると、だんだん距離のバランスが失われていくような感じがすることがあった。ほんのちよつと手をのばせば彼らの手が僕の体に届きそうな気がした。

長い引用になったが、ここには、『ハンテイング・ナイフ』を解説するための鍵がちりばめられているのである。ブイを目掛けて泳ぐ「僕」、ブイの上の「僕」を、本当に彼ら母子は見ているのであろうか。「僕」が見られているように感じるだけなのであろうか。「僕」の主観的な語りによって進められる物語において、そのように問うことは無意味であらう。しかし、「泳いでいると、体の上に彼らの視線を感じることもあった」という感覚は、純粹に「僕」の側だけに属する感覚であり、尋常ではない。「僕」の純主観的感覚に浮上してくる視線である。心理学に移行させずに考えれば（文学的に解説すれば）、彼らの隠された強い願望・欲望を肌で感じている「僕」の実感が生起させる視線と読めるであらう。ブイに易々と一直線に到達することができる「僕」に対する焼け付くような羨望の思い、「僕」はそれを肌で感じ取っているのだ。この意味において、ブイに一直線に泳ぎ着く「僕」は、「彼」の願望・欲望を遂行する代行者だと言える。

しかし、「僕」が「彼」の代行者であるのは、この意味においてだけではあるまい。海（「やわらかな肉」を切り裂くハハンテイング・ナイフ）である「僕」への熱い羨望、「僕」が（意識せずして）ふるう暴力性への強烈な欲望。「彼」の内に隠され、しかし、内奥で煮えたぎっている、「やわらかな肉」を切り裂きたい欲望、自分自身をハハンテイング・ナイフに化したい欲望、暴力性への欲望は、彼らが海岸に携帯してくる「銀色のポット」によって表出されているのだ。「しみひと

つない銀色の車椅子」によつても。「ナイフのようにきらりと光る」「銀色のポット」……。「彼」が隠し持っている暴力性、へハンティング・ナイフで切り裂きたい「彼」の欲望、「銀色のポット」が表象しているものはこれ以外には考えられない。「動かない脚」のために、自動力を持たず、社会に向けて自己拡張する方途を一切奪われている、受動性の極みに置かれている「彼」の世界への反転攻勢、反逆としての暴力。「彼」は切り裂きたいのだ、へハンティング・ナイフで世界を。しかし、「動かない脚」のために自らは切り裂けない「彼」。「僕」は「彼」のこの欲望を感じ取り、それを背にして泳いでいるのだ。だから、「彼」の海（「やわらかな肉」）を切り裂くへハンティング・ナイフになろうとする願望を代行しているのが「僕」だと言えるのだ。「僕」は「彼」の欲望、暴力性の代行者なのである。「銀色の車椅子」もまたナイフに準ずる凶器のイメージで描かれていることは言うまでもあるまい。「彼」が隠し持っていた欲望、暴力性が一挙に露出するのが、「ハンティング・ナイフ」の結末である。昼間のポットの輝きに対応する、夜の月光の下での車椅子の輝き。

車椅子に座つた青年はそんなテーブルの上に片肘をついて、一人で海を見ていた。車椅子の金属がたつぷりと月光を吸いこんで、氷のような白さに光っていた。それは遠くから見ると、まるで夜のためにしつらえられた特殊な目的を持つ精密な金属機械に見えた。車輪のスポークは異様に進化した獣の歯のように、闇の中に不吉な光を放っていた。「僕」が語りだしているのは、「彼」の車椅子の鋭利な刃物性、凶器性であろう。へハンティング・ナイフとしての車椅子。月光の下で、その凶器性を顕わにした車椅子に一人で座っている「彼」。「母は今ほもうぐつすりとお眠っています」、「彼」が単独者になれるのはその時だけなのだ。「双子の氷山みたい」な母子。影のように寄り添う母親から自由になれるのは、母親の死の擬態の時、「ぐつすりとお眠つて」いる時だけなのである。隠されていた「彼」の自我、真の自我の輪郭を顕わにする時なのだ。「銀色のポット」、「銀色の車椅子」として垣間見せていたへハンティング・ナイフを開示するのである。

「……。ただ僕はある日突然、無性にナイフというものが欲しくなりました。（中略）でもなにしろ、自分のナイフがどうしてもほしくなりました。それで知人に頼んでこれを買ってもらいました。（中略）母親にはもちろん内緒だし、その知人の他の誰も、僕がナイフをポケットに入れて持ち歩いていることなんて知りません。僕だけの秘密ってわけですよ」

秘密であるからこそその魅惑、空想の中だけで振り回すヘンテイング・ナイフだからこそ高まる魅惑。自己像（心的現実）の中で振りかざすだけだからこそその輝きを増す自分のヘンテイング・ナイフ。「自分のナイフ」とは、「彼」の隠していた真の自我、そうありたい理想の自我であろうが、社会的存在としての「彼」はそれを世間に露出してはならないのだ。「動かない脚」を持つ者として、「無」を装わねばならないのである。「自分のナイフ」所持への切実な希求、それは、ヘンテイング・ナイフで世界を切り裂きたい欲望に他ならない。自己をヘンテイング・ナイフに化させる欲望、と言い換えてもよい。ヘンテイング・ナイフと化して、世界という「やわらかな肉」に突き刺さり、それを切り裂いて消滅させ、その「無」の中に、ヘンテイング・ナイフという自我だけが存在している、という、まがまがしく、空虚な暴力性。「彼」の暴力性への夢とは、実は、「無」を創り出すことへの夢でしかなかったのである。

「何かを切ってみていただけませんか？」と彼は言った。

「彼」のこの依頼を聞き入れて、「目につくまわりのものをかたづけしから切り裂く」「僕」は、だから、「彼」の代行者なのだ。世界を切り裂きたい「彼」の欲望を「僕」が代行しているのである。昼間、海を切り裂くヘンテイング・ナイフとして、「彼」の欲望を代行していたのと同様に……。

さて、「自分のナイフ」で、現実社会（「みんな」）の「システム」を切り裂き、世界を切り裂いて、「彼」の自我だけが、その空無に突き刺さりたい、というのが「彼」の願望であろうが、「彼」が強烈に切り裂きたい「やわらかな肉」は、実は、

母親のそれではなからうか。「双子の氷山みたい」な母子、いつでも、どこでも、「彼」に影のように寄り添う母親。「僕はごく自然に彼の姿と彼の母親の姿を一体化して考えるようになっていた」という彼ら。しかし、外から見るほど、彼らは一体化した母子だったのであろうか。母親が「ぐっすりと眠って」いる間に、「母は自分の体のことを話されるのをとても嫌がるんです」という、言わば、母の「秘密」を他者である「僕」に暴露する「彼」。「母親にはもちろん内緒」の、「彼」だけの「秘密」であるヘバンティング・ナイフを他者である「僕」の前に開示する「彼」。最も濃密な関係性であった母子関係、「みんな」の「システム」に「彼」を繋ぎ止める母子関係、「彼」が真に切り裂きたいのは、この母子関係だったのでないのか。「母親にはもちろん内緒」の「自分のナイフ」で、母親の「やわらかな肉」を切り裂くこと。「システム」の外の単独者になるために、「彼」が先ず初めになすべきことは、この他にあるはずがない。作品の冒頭からの、「まるで読唇術でも使っているみたい」な彼らの一体性の強調はこのことの逆暗示であったはずだ。「軍用ヘリコプター」が、「ふたつのブイのちようどまん中」あたりの低空を切り裂いてゆくのは、「自分のナイフ」で母子関係を切り裂く「彼」のなすべき課題を実演して見せていたのだと言えよう。一对の「双子」のブイではない、一個の独立したブイ、「彼」の願望の自我像であつたはずだ。

ところで、「僕」は「彼」の欲望を代行しているだけであらうか。「彼」と「僕」の関係様態を別の角度から見ることとは出来ないであらうか。今まで、「彼」とその母親の「一体化」を指摘してきたが、隠された、真の「一体化」は、「彼」と「僕」の間にごそ成立しているのではなからうか。「一体化」を超えた融合化、同化ともいふべき重なり。目で常に彼らを探し求める「僕」。彼らに関心を示さず、彼らを「透明人間」を見るようにしか見ない「僕」の妻との対比で、「僕」の彼らへの関心の深さは浮上してくるであらう。「彼らの姿が見あたらないことで僕はなんとなく手持ち無沙汰のような気分になつてしまった」、「彼」は既に「僕」の一部分、「僕」の分身として存在しているのだ。「僕」の影なのである。「ブイの上

にうつぶせに寝転んでぼんやりと彼らの姿を眺めていると、だんだん距離のバランスが失われていくような感じがすることがあった。ほんのちよつと手をのばせば彼らの手が僕の体に届きそうな気がした、分身との重なり、分身を「僕」の中に回収していくプロセスと見てよい。

したがって、海を切り裂くへハンティング・ナイフと化している「僕」が身体に感じ取る「彼」の視線とは、「彼」の中に隠された世界を切り裂きたいという暴力性というよりは、「僕」の中に隠されていた暴力性と見るほうが真相に近接するであろう。「彼」が持ち歩く「銀色のポット」が「ナイフのようにきらりと光る」のは、「彼」がハンティング・ナイフを隠し持っていることの伏線ではあるが、「僕」が十分には意識化していない「僕」の暴力性を指し示しているのである。「銀色のポット」をナイフのように感じるのは「僕」なのだから。「彼」とは「僕」の無意識である。「僕」の中に隠された暴力性（「自分のナイフ」）、「僕」の無意識を「彼」によって意識化されていくのが、『ハンティング・ナイフ』の深層的ストーリーだと言っても過言ではない。前に留意しておいたように、頑健な身体とは裏腹に、「僕」の自我の輪郭は揺らぎ、心の奥深くは波立っているのである。

「僕」が「沖あい」のブイに向かって泳ぐことの意味が明白になったきたであろう。「彼」の視線によって泳がされている、と言っても過言ではないのであり、「僕」の中に隠され、意識化されていなかった暴力性に気づくための儀式だと言つてよいのだ。「ホテルを引きあげる前日」の出来事として、作中で唯一具体的に語られた「僕」のブイへの到達、そこで出会ったのが「太った女」だったのだから。（この出会いが、その夜中の「彼」との出会いと対応していることは明らかであろう。）

腹のまわりにはまるで土星の輪のように脂肪が付着し、手首や足首のくびれさえもが今にも消え失せようとしている。

女の太り具合には不健康な印象はなかった。顔だちも悪くない。ただ肉がつきすぎているだけなのだ。磁石が鉄粉を吸い寄せるように、脂肪がごく自然に彼女の体にまつわりついているのだ。

「僕」の切り裂くべきもの、「やわらかな肉」との出会いであることは明白だ。無自覚的に、海を切り裂くヘンティング・ナイフと化していた「僕」が、自己の中の暴力性を意識化し、露出するひとつの契機である。切り裂くべき「やわらかな肉」との出会い、この時の「僕」は、無論、まだ、隠された「自分のナイフ」（もう一人の自分）に気づいているわけではない。しかし、「太った女」との出会いには、確実に「僕」の無意識を揺さ振ったはずだ。

「太った女」に邂逅したその日の深夜（正確に言えば、その次の日になるが）、何かに揺さ振り起こされた「僕」……。僕が目を見ましたのは異様に激しい動悸のせいだった。まるで何かに体ぜんたいを揺り動かされているような具合だった。心臓のあたりに目をやると、胸の肉がびくびくと小刻みに震えているのが夜目にもはっきりと見えた。それは僕にとってははじめての体験だった。

「僕」の「体ぜんたいを揺り動か」した「何か」。その「何か」は、「彼」だと言っても、「僕」の無意識だと言ってもよい。「彼」「僕」の無意識が「僕」の意識に訴え掛け、強烈に自我をノックしているのである。「僕」の心に眠っていた暴力性が目を覚ました、と言ってもよい。ともかく、昼間、「太った女」という切り裂くべきもの、「やわらかな肉」に出会ったことで、「僕」の中に隠されて意識化されていなかった暴力性が、意識の中に呼び出されてきたのである。

「ぐっすりと眠っていた」妻を後にして、コッテージの夜の庭に出た「僕」と、「ぐっすりと眠って」いる母親を後にそこに出てきた「彼」との出会い。月光の下での、「コッテージのまわりをゆっくり一周し」、「庭のまん中を一直線に横切」つての「彼」との出会いは、真の自己、分身との出会い、一体化の儀式めいているであろう。「彼」に「こんばんは」と「小

さな声」で呼び掛ける「僕」は、「おそろしく声が小さかった」「彼」に同一化しているのだと言えよう。

「彼」の秘密、「自分のナイフ」を開示し、「僕」に手渡す「彼」。

刃が固定したナイフとして手にとってみると、僕はそのずしりとした重みにあらためておどろかされた。ただ単に重いというのではない。それはまるで手のひらにびたりと吸いつくような奇妙な重みなのだ。(中略)握りのカーブも理想的といつてよく、手にしっくりとなじんだ。ぐっと握り込んでも不自然な感触はまるでなく、指をあけてもそれはきちんと手の中に収まっていた。

「彼」の「自分のナイフ」と言うよりも、「僕」の「自分のナイフ」と言うべきであろう。「手のひらにびたりと吸いつく」、「きちんと手の中に収まる」「僕」の「自分のナイフ」……。 「僕」は「自分のナイフ」を手にしたのである。それは、隠され、意識化されていなかった真の自己との出会いでもある。「よく手になじむ」「理想的」な真の自我を自己の中に回収した「僕」。分身を自我の中に回収したのだ。「何かを切ってみただけませんか？」と「彼」に言われて、世界を切り裂く「僕」は、世界に向けて、回復した真の自己を振り回しているのだと言えよう。

僕は目につくまわりのものをかたっぱしから切り裂きながら、ふと昼間ブイの上で会った太った白い女のことを思い出した。彼女の白くむくんだ肉体が、疲弊した雲のように空中に浮かんでいるような気がした。ブイや海や空やヘリコプターが遠近感を失ったひとつのカオスとして、僕のまわりをとりかこんでいた。僕は体のバランスを失わないように気をつけながら、静かにゆっくりと、ナイフを空中にすべらせた。夜の大気は油のようになめらかだった。僕の動きをさえぎるものは何もなかった。夜は深く、時はやわらかな汁気のある肉体のようだった。

「僕」のヘンテイング・ナイフを月光の下で頭わにしているのだ。「彼」によって引き出された「僕」の「自分のナイフ」で、「太った女」のイメージ(像)を切り裂く暴力性を頭わにした「僕」。「僕」を取り巻く世界の全て、時間さえも

が、「やわらかな汁気のある肉体」と化した、混沌とした世界を切り裂き、鋭利に突き刺さる「僕」……。